

広仁会賞 第35回 大森 慶太郎

題名：Clinically remitted childhood asthma is associated with airflow obstruction in middle-aged adults

(臨床的に寛解した小児喘息の既往は、中年期成人での気流閉塞と関連している)

発表誌：Respirology. 2017; 22: 86-92.

要旨：

背景：成人喘息は COPD の危険因子になることは知られているが、寛解した小児喘息の既往が成人期の肺機能に与える影響は不明である。今回、寛解した小児喘息の既往が、中年期の一般成人における気流閉塞の危険因子になっているかどうかを検討した。

方法：5施設での健康診断受診者のうち35-60歳の9,896人を対象に、アンケートと肺機能検査を行った。小児期/成人期に医師から喘息と診断されたことがあるか、喘息様症状の有無をもとに4群に分類（健常群9,154人、小児喘息群 [寛解した小児喘息] 287人、成人喘息群 [成人期のみ喘息] 354人、小児+成人喘息群 [小児期、成人期ともに喘息] 101人）し呼吸器症状、肺機能検査について比較を行った。

結果：小児喘息群は健常群に比べ、咳、痰、息切れ、動悸といった呼吸器症状の増加はなかったが、有意に%1秒量（%FEV₁）、1秒率（FEV₁/FVC）が低値であった。気流閉塞（FEV₁/FVC<0.7）を有する頻度は、健常群（2.2%）に比べて、小児喘息群（5.2%）、成人喘息群（14.4%）、小児+成人喘息群（16.8%）で有意に高かった。多変量解析を行うと、寛解した小児喘息の既往は、%FEV₁、FEV₁/FVCを低下させ、気流閉塞と独立して関連する因子（Odds ratio 2.87）であった。さらに小児喘息群の中で、喫煙者は非喫煙者に比べFEV₁/FVCが有意に低値であった。

結論：中年期成人において臨床的に寛解した小児喘息の既往は、気流閉塞と関連がみられた。喫煙と寛解した小児喘息は相加的に気流閉塞を生じさせる因子と考えられた。